

実践英語教育の現状について

——第3回FDセミナー報告から

基礎教育センター・教授
加藤 光也

1. はじめに

ここでは平成18年10月5日に開かれた第3回FDセミナーでの発表をもとに、実施2年目を迎えた実践英語教育プログラムの現状と課題について報告する。

結論から言えば、平成17年4月からの1年半の実践英語プログラムは、授業の半分を外部委託することや統一授業の導入などの大きな改革に対して十分な準備期間がなかったことを考えれば、これまでのところ、ますますの成果を上げていると言えるのではないかと思われる。

2. 授業配置と内容

前回の報告とも重なるが、まず、実践英語教育プログラムにおける授業配置とその内容を確認しておきたい。

1年次 78クラス+再履修5クラス

Ia b (日本人授業、統一)	Icd (NSE授業、統一)
Reading, Listening 統一テキスト、統一試験	Oral Communication (Role - Play, Presentation) 統一テキスト、統一試験

2年次 65クラス

IIa b (日本人授業、選択)	IIcd (NSE授業、統一)
三つのメニュー (Media, Reading, Comprehensive) から選択	Oral Communication (Role - Play, Debate) 統一テキスト、統一試験

教員配置

日本人専任 22人	日本人非常勤 42人
Berlitz 講師 22人	

・2年次のクラス数が少ないのは、健康福祉学部では1年次の実践英語Iだけが必修であり、2年次には荒川キャンパスで医療英語を学ぶためである。

・1、2年次の日本人担当授業で専任教員が担当しているのは三分の一以下であり、今後、再履修クラスの増加や、専任教員の退職に伴い、この比率がますます減って



くると、十分に責任を持った教育ができなくなる恐れがある。

3. これまでの課題

これまでの一年半の実践英語プログラムの運営においては、すでに次のような問題点が指摘されている。

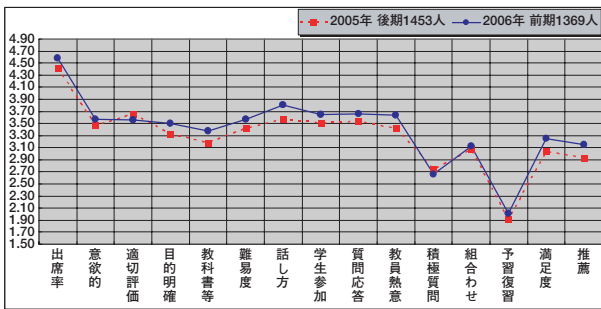
- ・レベル別のクラス編成の効果
- ・日本人授業のテキスト、授業が適切であるかどうか
- ・日本人担当授業とNSE担当授業の連携
- ・NSE授業のテキスト、授業が適切であるかどうか
- ・統一試験の難易度
- ・非常勤講師との連携
- ・NSE専任教員の不在

以下では、18年前期末に本学（おもに日本人担当授業が対象）とベルリッツが実施した授業評価アンケート調査の結果を参照しながら、これらの問題点の分析と今後の改善点について述べることにする。（セミナー当日には詳細な資料が用意されたが、以下の説明では資料の選択的な例示にとどめる。）

4. 日本人担当授業に関するアンケート結果

(1) 全体の意見

7月におこなわれた本学のアンケート調査の経年比較によれば、前年度のアンケート調査に比べ、少しずつではあるが、多くの項目でポイントが上がっている。



赤：平成17年度前期、青：平成18年度前期

これは、専任、非常勤、およびベリリッツの講師を含めた教員全員が新しい実践英語プログラムに慣れてきたためと思われるが、学生の側からは以下のような意見が目についた。

- ・ 教員の説明（留学時の体験等）がよかった
- ・ 補足資料が役立った
- ・ CALL教室の使用について
- ・ テキストが易しい（高校と同じ）
- ・ 和訳（全訳）がほしい

教員の工夫を好意的に評価する意見が複数見られたことは、教員の側が統一授業に慣れてきたことを裏付けているようだ。

テキストについて、易しすぎるという意見がある一方、全文の和訳がほしいという意見が複数見られることは、学生の英語力のかなりのばらつきを示すとともに（本学の入学生のうち、ほぼ三分の一の者が2次試験の英語の試験を受けていないことに注意する必要がある）、同じテキストを使った統一授業の難しさを示している。

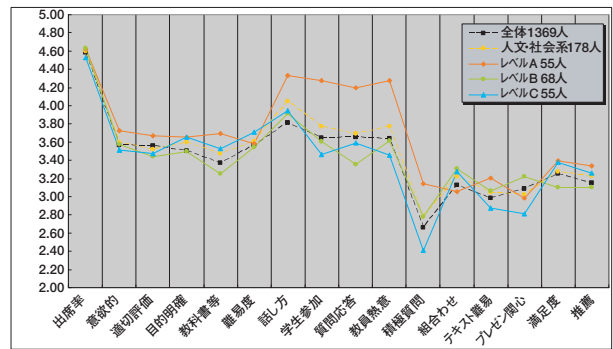
成績評価の公正さを保つためには統一授業と統一試験が必要であると考え、授業のガイドラインを練り直し、それぞれのレベルに合った効果的な授業ができるよう、さらに工夫する必要がある。

CALLを利用した授業については、効果的であるという意見と、機器の操作に時間がとられるという意見が半々であり、今後も利用法を考える必要がある。

(2) レベル別ごとの評価

今回のアンケート調査ではレベルごとの調査結果も集計してみた。学部、学系によって結果にずれがあるが、人文・社会系、法学系、理工学系、システムデザイン学部、健康福祉学部においては、AレベルとCレベルの学生の評価の差がはっきりと出ている

参考までに人文・社会系の比較グラフを次に掲げる。



赤：Aレベル、緑：Bレベル、青：Cレベル、黒：全体の平均

Aレベルにおいては、学生の積極性と教員の熱意が相乗効果をもたらして、各項目において高い評価に結びついていることがうかがわれる。これはまた、レベル別のクラス編成の効果とも言えるだろう。

5. NSE 担当授業に関するアンケート結果

NSEの授業については、18年度の前期末試験時に、ベリリッツでもアンケート調査をおこなっている。質問は4つのグループに分かれ（「教員に関して」「講座に関して」「満足度に関して」「自己評価に関して」）、計16の質問項目がある。本学の5段階評価とは違って、4段階の評価（強くそう思う、そう思う、そう思わない、強くそう思わない）になっているため、単純には比較できないが、たとえば、1年次生対象のアンケートで、「教員に関して」の質問グループの結果は次のようになっている。

	合計	①強くそう思う	②そう思う	③そう思わない	④強くそう思わない	⑤不明
Q1	1609	607	889	99	14	0
	100%	38%	55%	6%	1%	0%
Q2	1609	414	926	242	27	0
	100%	26%	58%	15%	2%	0%
Q3	1609	492	972	130	14	1
	100%	31%	60%	8%	1%	0%
Q4	1609	666	841	80	20	2
	100%	41%	52%	5%	1%	0%

Q1: 教師は熱意を持って授業を行ったと思いますか

Q2: 教師の指示・説明は分かりやすかったと思いますか

Q3: 教師は質問や疑問に丁寧に答えたと思いますか

Q4: 教師は授業の準備をして授業をしていたと思いますか

ほかの質問グループでも、「自己評価に関して」のグループの2項目（「予習・復習や課題を行って授業に出席しましたか」「疑問は積極的に質問しましたか」）において「そう思わない」という回答が多かったのを除けば、

ほぼ同様に、「そう思う」という肯定的な意見が一番多い傾向が出ており、全体として、講師と授業に対する満足度はかなり高いと認められる。

NSEの授業に対する学生からの個々のコメントでは、おもに以下のような意見が目についた。

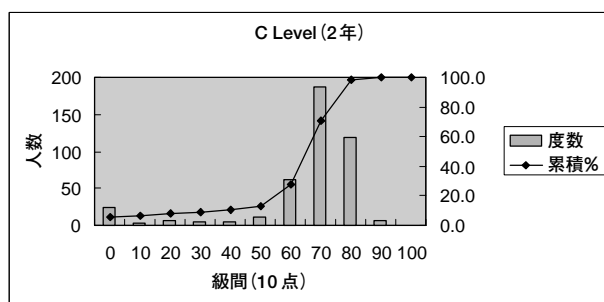
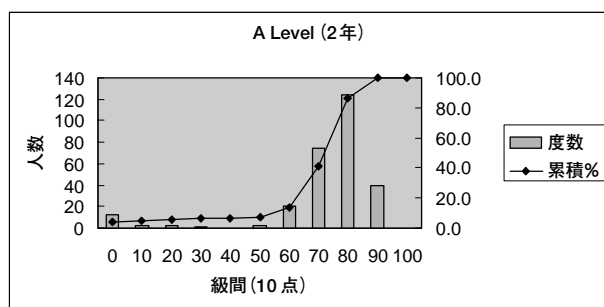
- ・ 会話に慣れることができた
- ・ Presentation の準備などで考える力がついた
- ・ テキスト、授業が易しすぎる
- ・ 授業内容が講師によってまちまち
- ・ 学期末試験が易しすぎる
- ・ 日本語を話してほしい

前年度より好意的な意見が多く見られる一方、前年度に引き続き、テキストや試験が易しすぎるという意見、また講師によって授業内容がまちまちであるという意見が複数見られた。

テキストに関しては、18年度から使い始めたベルリッツ開発のテキスト教材がまだ本学の学生にとっては不十分であるとの検討結果に基づいて、ベルリッツと協議を重ね、19年度からは全面的に改定し、教材資料も大幅に追加したテキストを使用する予定である。これによって、講師間の授業内容のばらつきもかなり改善されると期待される。

(2) レベル別の成績結果

今回のベルリッツのアンケートでは、平成18年度前期のNSE担当授業の試験成績をレベル別に集計してもらった。次に2年次生のAレベルとCレベルの成績分布表を示す。



上の分布表のAレベルにおいては80点台が一番大き

な山になっているのに対して、Cレベルでは70点台が一番の山になっている。同じ教材を使い、統一試験をおこなったことを考えれば、学力の差をかなり正確に反映しているものと見る事ができるし、それぞれの学力に応じた効果的な授業をおこなうためには、レベル別のクラス編成が有効であることの裏づけにもなっている。

成績が0点の者が少なからずいることは、おもに欠席回数が多かったためと思われる。(実践英語では、授業を5回以上欠席した者は成績評価の対象からはずしている。)

ついでながら、18年度前期の不合格者数は以下のとおりである。

実践英語I a	106人	実践英語I c	120人
実践英語II a	96人	実践英語II c	140人

今後、再履修生が増えるにつれ、荒川キャンパスや日野キャンパスにおける再履修クラスの設置にも注意する必要がある。

6. 今後の課題

実践英語プログラムの実施においては、おもに以下のことを今後の重要な検討課題と考えている。

(1) NSE担当授業の内容の検討

これまでの検討から、本学の学生にとって必要であり、また学生たちが求めているのは、単なる‘Conversation’のスキルではなく、‘Oral Communication for Academic Purposes’でも言える力の養成であると考えられるので、その方針に基づいて、テキストの改訂と授業ガイドラインの改善を進めてゆくつもりである。

(2) NSE専任教員の補充

教員の移動などのため、専任のNSE教員が不在となり、大きな問題となっていたが、19年度からは2人のNSE専任教員が採用されることとなり、入試の質の確保や、ベルリッツへの業務委託分の授業の統括などでの点で大幅な改善が見込めることになった。

(3) 日本人担当授業とNSE担当授業の連携

学生アンケート、教員アンケートでも評価が低く、今後、全面的な見直しが必要と考えている。

(4) 日本人非常勤講師との連携

非常勤講師からの意見にも、日本人担当授業のガイドラインがまだ十分に周知されていないことがうかがえる

ので、今後いっそうの連携に努めたい。

(5) 学生へのフィードバック

FDセミナーでも指摘されたことだが、学生の意見を直接聞く場が不足していると思うので、今後、実践英語についての意見を聞く場についても工夫したい。

また、実践英語の仕組みについて、学生にもう少し丁寧に説明してゆく必要があると考えている。

7. 最後に

最後になるが、以下の点を全学への要望として記しておきたい。

- ・ 英語教育には全学の協力が必要

時間割の策定や統一試験の実施については全学の理解が必要なので、今後ともご協力をお願いしたい。

また、各学部、学系には英語が堪能な教員が多く揃っているので、専門課程でも語学の指導に努めていただくようお願いしたい。

- ・ 第一次中期計画の評価に向けて

いずれ第一次中期計画の評価を迎えることになるが、第二次中期計画における英語教育の位置づけについては、外部への業務委託のあり方等を含め、全学の意見を踏まえて検討すべきと考えている。